

## <コーディネーター>

●大島 まな

(九州女子大学 准教授)



九州大学教育学部社会教育学講座助手、九州女子短期大学講師、助教授を経て現職。福岡県社会教育委員。昭和59年より3ヵ年、福岡教育大学社会教育（三浦）研究室が主催した「青少年教育キャンプ」にスタッフとして参画して以来、「子どもを鍛える」プログラムに関心を抱く（三浦清一郎編著『現代教育の忘れもの—青少年の欠損体験と野外教育の方法』1987年）。平成24年度には、山口市立井関小学校放課後児童クラブにおいて「『生きる力』を育むプログラムの実践的調査研究」を実施、日常生活場面における体験活動プログラムの教育効果を検証した。

## 2部 ～高齢者の社会参画を考える～

### 「高齢研究者に問う。2020年の『高齢者爆発』をどう回避すべきか？」

平均の話ですが、厚労省の発表で、「介護の世話にならず」、「自分のことは自分で出来る」という日本人の「健康寿命」は、男性70歳、女性73歳で尽きます。一方、2020年は昭和20年生まれが75歳となり、後期高齢期に突入します。この時、すでに男女とも「健康寿命」は尽きています。以後、団塊の世代が続きます。2025年、この世代が80代に突入すれば、病院で死ぬベッド数が足りなくなるという試算も出ています。

後期高齢者の「医療費」・「介護費」の国家負担を想定すれば、現代の福祉システムは崩壊に瀕し、若い世代の老後資金は消失します。

高齢者は、教育も福祉も基本的に「保護」の対象としてしか認知していません。医学がいう「廃用症候群」に照らせば、「何もしない高齢者」、「安逸だけを求める高齢者」こそが問題なのです。老衰とぼけは彼らの間で急速に進行し、「無縁社会」の中で立ち往生することになるでしょう。今回は、司会者も登壇者も高齢者で、高齢研究者が高齢者のあり方を論じるという企画です。

## <登壇者プロフィール>

●三浦清一郎

(月刊生涯学習通信「風の便り」 編集・発行人)



社会教育・生涯学習研究者、月刊生涯学習通信「風の便り」編集長。近年執筆に集中し、「子育て支援の方法と少年教育の原点」、「The Active Senior—これからの人生」、「しつけの回復 教えることの復権」、「変わってしまった女と変わりたくない男」、「安楽余生やめますか、それとも人間止めますか」、「自分のためのボランティア」、「未来の必要（編著）」、「熟年の自分史」（いずれも学文社）などがある。昨年は下関の高齢者グループ「再起会」と協働して「生涯現役と介護予防のいろはカルタ」を制作し、併せて「生涯現役と介護予防の老年学」を出版している。

●瀬沼 克彰

(桜美林大学 名誉教授)



桜美林大学教授一名誉教授。研究は、余暇問題から出発し、40代以降は生涯学習の分野に傾注してきた。宇都宮大学、文科省社会教育官を歴任、現在は、生涯学習推進の財団の理事、評議員、複数の省・自治体の委員を兼務している。著書は多数。主なものに「現代余暇論の構築」、「余暇事業の戦後史」、「生涯学習と地域ルネッサンス」などがある。近年は、「単発講座」から「連続・継続講座」へ、「受託研究」から「協働研究」へ、省庁・大企業などの「大規模組織」から、自治体、市民団体、大学エクステンションなどの「中小規模組織」との協働に活動の重点を移している。

## <コーディネーター>

●森本 精造

(NPO法人幼老共生まちづくり支援協会 理事長)



福岡県社会教育課長、福岡県立社会教育総合センター所長、穂波町教育長、飯塚市教育長を経て現職。穂波町時代、西日本で初めての「学校選択制」を導入。全公立小学校に導入した穂波「子どもマナビ塾」、合併後の飯塚市では「熟年者マナビ塾」などの多くの先駆的行政施策の開発を手がけて来た。2010年度にNPO法人幼老共生まちづくり支援協会を設立し、積極的に活動を展開中である。中国・四国・九州地区生涯教育実践研究交流会代表世話人。